

ルージュの伝言

yaoi801

ナンシーは留学生でもハーフでもない。「山南志穂」という名前だから、苗字と名前の間を取って、みんなナンシーと呼んでいた。

大学院に入って最初の夏休みが終わろうとしている頃のことだった。晴れた日曜の朝に、携帯電話のけたたましい着信音が響いた。見覚えも無い電話番号に緊張して、僕は電話に出た。

「もしもし？ アタシ！」

見覚えの無い電話の主は名乗らない。でも声ですぐに分かる。

「ナンシー？」

「やつほー！……って、なんかキョドってる？」

いつもより早起きをして、洗濯物を干し終え、二度寝に向かう午前九時——まだ休日は始まったばかりだ。そ

んな穏やかな時間を壊すように、ナンシーの澁刺とした声が届いた。

「もしもし、寝てた？」

「いや、起きていたよ」

「じゃ何？ あ、バイト中とか？」

「登録してない電話番号だったから」

僕はあらためて緊張し、早く要件を聞いて電話を切りたい一心だった。そんなこと知るよしもないナンシーは、僕がいつもと様子が違うとあれこれ詮索し出した。やつと用を聞けば、ようは「ホームセンターに行きたいから車出して！」という一言だった。

気乗りしない思いが少しもなかったと言えば嘘になる。だけど僕は御機嫌だった。研究室に配属されてからというものの、ほとんど話せる機会がなくなっていたからだ。

ナンシーのことは、「女の子」だと意識するような仲でもない。それでも待ち合わせまでの十五分の内に、シャ

ワイを浴び、髭を剃り、髪に櫛を入れ、アイロンを掛けてあつたシャツを羽織つた。僕には最高の気晴らしだと思えた。玄関にぶら下げたCDケースを引っ掴み、駐車場に駆け出していた。

(続く)